

刊行にあたって

医薬品・治療研究会（代表：別府宏圀）は1986年にTIP "The Informed Prescriber"「正しい治療と薬の情報」誌を発刊して以降、適切な薬の情報作りをしてきましたが、日本の薬の問題の根の深さは並大抵ではありません。薬害を生む構造は、特別な薬だけでなく、日常的に使っている薬にすでに存在するということに気づいてきました。

「くすりのチェックは命のチェック」をテーマに1997年9月、第1回医薬ビジランスセミナーを開催したところ、500人以上の参加を頂きました。薬害の反省から入って医薬品の適切な評価をメインテーマとした会というのは、おそらく日本では初めて、世界的にもたぶん初めての画期的な試みだったのではないかと思います。日本の薬は何が問題で、私たちは何を、どうしなければならないのか、何ができるのか、非常に前向きに真剣な議論が展開されました。

どれをとっても貴重な内容の発表、討論であり、しかも、いわゆる「脳代謝改善剤」はその時の指摘どおりに大部分が承認取り消しになりましたし、ペロテックの使用が半減して喘息死は40%減少しました。「EBM」という用語も、多少問題はかかえながらですが、普及してきました。

医療現場では、病院として採用すべき薬剤をどうチェックするのか、個々の患者さんに処方してよい薬と処方すべきでない薬をどう見分けるのか、情報をどの様に得て、それをどのようなポイントでチェックするのか、患者向けの情報はどう考えるのか、患者さんにとっては自分に処方されている薬は大丈夫なのか、また市民として、患者グループとして薬を監視しようとしている方々には、良い薬と悪い薬を見分けるにはどの点にポイントを置いてチェックすればよいのか。情報の公開をどのように考えるのか。今、そのことに対する関心がいよいよ高くなってきています。

2年前にはまさしく、そのことを議論しましたし、その内容は、全く色あせるどころか、ますますその重要性を強くしています。報告集を出版して、セミナー出席者だけでなく、より多くの人にその内容を知って欲しい。そのような思いが何とか実現いたしました。

医師、薬剤師だけでなく、市民グループやマスコミの方々にも、薬を考える際の座右の書として大いに利用して頂きたいと思います。

1999年9月
医薬ビジランスセンター JIP 代表 浜 六郎